浄土宗ニュース（NEWS）

コロナ禍における路上生活支援
つながる〝慈しみ〟のリレー
ひとさじの会

「ひとさじの重湯を差し上げるように、ほんのわずかな支援ではあるけれども、人々に寄り添いたい」

社会慈業委員会「ひとさじの会」は、物質的な「支援」だけではなく、人と人とが支え合うという縁、「支縁」の輪を広げることを理念とし、吉水岳彦師（東京都光照院住職）を発起人に、平成21年4月、浄土宗の僧侶有志が中心となって設立された慈善団体。

路上生活者に寄り添い、支援物資の弁当を配る参加者

東京都の山谷地区を拠点に、浅草・上野地域で毎月2回、夜回りをしながら路上生活者におにぎりを配るなど、様々な活動を行っている。

コロナ禍による外出自粛により4月から慈善団体が行う炊き出し会場が減少。同会では、食事をおにぎりから弁当に変えるなど様々な感染防止対策を取りつつ、夜回りによる配食を毎週行うようになった。

こうした状況を鑑み、食料に加え、マスク、コロナについての基礎知識や相談先を書いたチラシ、石鹸、薬、除菌剤など感染予防のための多くの物資も配布している。

同会では、広く物資の支援を募っており、すでに国内外の仏教教団、縁のある支援者、さらには一般企業からも協力の声があがっており、まさに「支縁」の輪が広がっている。

こうした「支縁」に対し、吉水師は、「食やマスクを必要としている人たちが大勢おられる今、多くの方の慈善や慈愛の気持ちのおかげで活動を続けられることは、本当にありがたいと感じます。みなさまには、様々な形でご協力を賜れば幸いです」と語る。

人から人へつながる慈しみのリレー。あなたもそのバトンを受けて想いを届けてみては。

協力希望の方は、左記事務局までご連絡を。

「ひとさじの会」事務局
浄土宗光照院内
TEL＝090（6115）8147
郵便振替口座＝00100-9-484884「社会慈業委員会」

遺族のグリーフケア
僧侶と葬儀業者が意見交換

4月22日、首都圏の浄土宗僧侶有志や葬儀業者などが、遺族のグリーフ（悲嘆）ケアや供養と感染症対策のバランスをどのように取るかについて、オンライン会議システムを使って意見交換会を行った。

これは、浄土宗総合研究所の宮坂直樹研究員と遺族へのグリーフサポートやエンバーミング（亡くなった方の身体を整え生前をしのぶ姿に近づける遺体の衛生保全処置）を行う株式会社ジーエスアイ（東京）橋爪健一郎代表が中心となって企画したもの。

橋爪代表は、「新型コロナウイルスで亡くなった方の葬儀では、厳重な感染防止対策のため遺族が全く関わることができない。現場では葬儀の簡略化も進んでいるので、コロナ終息後の葬儀は、家族葬より進んだ個人葬になるのではないかと懸念している。葬儀は、悲嘆にくれる遺族の心のケアをする場でもあるので、苦しむ方が増えかねない。また今後、経済的困窮による自死が増えることも懸念される」と危惧を吐露した。

参加した僧侶からは、「普段から檀信徒とコミュニケーションを取り、関係性を築くことが大切であると感じた」「経済的サポートは難しいが、悩みに寄り添い自死を防ぐべき」「できる範囲での、個々の取り組みが重要になってくるのでは」などの意見が出た。

最後に宮坂研究員が「私たち僧侶は、どういう状況であっても遺族に寄り添うことが大切。今後、コロナ禍に苦しむ人に対し、心のケアなどサポートが重要になる。支援の輪を広げていきたい」と締めくくった。

仏教精神活かした社会活動高く評価
第44回正力松太郎賞に
平野仁司師・仏教情報センター

長谷川岱潤師

平野仁司師

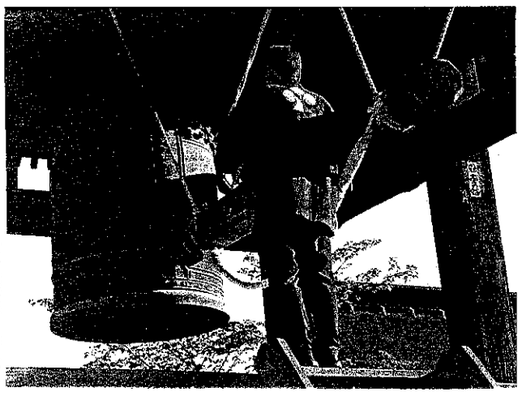
毎年、仏教精神に基づいて青少幼年の育成や教化に尽力した団体・個人に贈られる「正力松太郎賞」（全国青少年教化協議会主催）に、今回は神奈川県座間市・宗仲寺前住職の平野仁司師と一般社団法人・仏教情報センター（長谷川岱潤理事長・東京都品川区戒法寺住職）が選ばれた。

平野師は、寺院を子どもたちの「心の教育」の場にしようと、昭和30年に日曜教園を開設。月に一度、地域の小学生を寺院に集め、盆踊りや念珠繰りといった仏教行事を共に行うなど、50年以上にわたり青少幼年の宗教情操教育に努めた。

平野師は「これからも子どもたちがたくましい心を育くめるよう活動を続けたい」と意気込みを語った。

宗派を超えた僧侶らが運営する仏教情報センターは、年間4千件以上の相談が寄せられる「仏教テレフォン相談」を中心に、人々の苦しみに寄り添う活動が評価されての受賞となった。

新型ウイルスと戦う人々へ
〝共感の鐘〟　信州善光寺


写真提供：善光寺

長野市にある善光寺では5月8日から31日まで、同寺とゆかりのある各地の寺社とともに、新型コロナウイルスの治療などに携わる医療従事者への感謝などの想いを込め、境内の梵鐘を打ち鳴らした。

「共感の鐘」と名付けられたこの企画は、長野オリンピック開催時に平和を祈願して撞かれた善光寺の梵鐘を、平穏な世を願い再び打ち鳴らしてほしい、との市民の発案に同寺が賛同し始めたもの。

期間中、毎日17時より5回を打ち鳴らし、それぞれに、医療従事者への感謝、闘病中の患者と家族へのお見舞い、亡くなった方への追悼、不安やストレスを抱く人への安らぎ、ステイホームなど自ら律する気持ちを忘れない、との想いが込められた。

この活動は、浄土宗寺院20カ寺を含む、53の寺社（5月20日現在）でも行われ、全国で想いをのせた鐘の音が響いた。

同寺寺務総長・若麻績享則師は、「共感の鐘で心を合わせ、感謝と安らぎ、そして明日への希望をもってほしい」と語った。

浄土宗
なむちゃんエイド
SINCE 1993
紙代の一部が難民救援に役立っています。
「なむちゃんエイド」紙代の一部は、国連UNHCR協会に贈られ、世界の難民救援のために使われています
Hello なむちゃん ©浄土宗／しきしげゆき 1993